

グローバル化と都市変容 II  
 —— 社会関係が社会起業家の創業動機に与える影響 ——

2010/11/7  
 第83回日本社会学会全国大会@名古屋大学  
 慶應義塾大学政策・メディア研究科  
 西田亮介  
 ryosuke@sfc.keio.ac.jp

1

概要

- 2000年前後に、社会問題解決と、自律した収益性確保の両立を掲げる「社会起業家」と呼ばれる主体が国内に登場。あるいは、既存主体に新しい注目が集まった。
- 冷え込む（社会）起業を取り巻く環境。
  - 「リーマン・ショック」等をきっかけとするリスクマネー、VCの活動凍結、パイオプームのファンド償還期による新規投資の不在
  - 輸入された社会部門の担い手とその「失敗」
- それでは、なぜ社会起業家は創業に至るのか、また、「日本の社会起業家」は一過性の流行に過ぎないのか。
- 共通のバックグラウンドを持つ3事例の起業家の事例から考察。
  - 偶発的な「隠れた起業家教育の契機」の連鎖と安定化

2

社会起業家とは何か

- 「社会的課題の解決をミッションとしてもち事業として取り組む新しい事業体」（谷口 2006）として、社会的企業（Social Enterprise）を定義。社会的企業の創業者が社会起業家（Social Entrepreneur）。
- 特定の法人格を指すわけではない。
- 無償で社会問題解決に取り組む「ボランティア」と、純粋な営利事業を行う「企業」の中間的位置づけ（塚本・山岸 2008）。
- 世界的には欧州では、連帯経済の文脈で、アメリカでは創業の文脈において、30年近くかけて新しい主体として成熟
  - 日本では生活協同組合などの事例を除いて、あまり育ってこなかった主体。

3

社会起業家とは何か

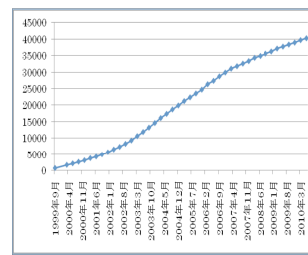


図1: NPO法人数の推移 (「内閣府NPOホームページ」より筆者作成)

- 8000の事業者、市場規模2400億円、32万人の雇用者（経産省 2008）
- NPO法人数は、「純粋な」社会起業家数ではなく、経産省の調査は母数が少ないため、社会起業家、あるいは、社会的企業数を表しているわけではない。
- しかし、国内に数千～数万規模の事業者が存在していると推定可能。

4

冷え込む創業環境

- 2007年、2008年、2009年の国内IPO件数、121件、49件、19件（野村證券 2010）。
- リーマンショックに伴うVC等リスクマネー供給源の活動低下。パイオファンドの償還期による新規投資活動の引き締めも影響。
- 「2010年度 新入社員の意識調査」における「今の会社に一生勤めようと思っている」かを問う項目を選択した新入社員の数は、6年連続上昇し過去最高の57.4%を記録（日本生産性本部 2010）。「社内で出世するより、自分で起業して独立したい」という質問に「そう思う」「そう思わない」で答える設問。前者の選択者が7年連続で減少し当時過去最低の12.8%。<sup>5</sup>

問題設定

- 起業を取り巻く環境が厳しいにもかかわらず、なぜ、社会起業家たちは、「起業」するのか。
  - それは一重に個人の資質によるものなのか、否か。
- あるいは、社会起業家も海外から輸入された「異物」にすぎず、一過的な流行なのか。
- 三つの事例をもとに考察していく。
  - NPO法人フローレンス 駒崎弘樹氏
  - NPO法人カタリバ 今村久美氏
  - 合同会社マイアース・プロジェクト 岡崎雄太氏
  - 事例概略は、配布資料参照。共通項は、いずれも、社会性、事業性、革新性を兼ね備えた、同じ大学出身の「社会起業家」ということ。前2者が2000年、2001年に活動開始、後者は2008年活動開始。<sup>6</sup>

## 起業の経緯と特徴

- ・ 身近な出来事から生まれる問題意識（西田 2010）。
  - ・ 母と交わした、知人のワーキングマザーに関する会話（駒崎氏）
  - ・ 大学進学時に感じた地元との教育環境の落差（今村氏）
  - ・ 世界大会に出場するほどの腕前を持つ趣味のカードゲームを、大学時代に感じた環境に関する危機意識と結合（岡崎氏）
- ・ 問題意識から起業に至るまでの時間差。
  - ・ 進路選択における逡巡。
- ・ 人間関係の繋がりが培う起業への志向性。
  - ・ 先輩起業家からの影響（駒崎氏、今村氏）。
  - ・ 同じ志を持つ仲間たちからの影響（岡崎氏）
- ・ 共同体が有する資源からの影響
  - ・ IT起業家育成の中で培われたノウハウの利用（駒崎氏、今村氏）
  - ・ 研究室に設けられたルールの活用と、継続的な社会起業家の排出（岡崎氏）

## 「隠れた起業家教育」の契機

- ・ 起業に対する理解が十分ではない社会環境や、創業環境のなかで、起業家たちが持つ「問題意識」を起業に繋げていく契機が複数存在している。それらが半ば偶然的に大学や中間支援組織を介して連なることで、正規の起業家教育過程に期待されるべき、動機づけや事業化などの側面を相互作用を経て補完するに至っていることがわかる。
- ・ このような「隠れた起業家教育」の契機の連鎖によって、個々の起業家の問題意識を出発点にしつつ、事業性と固有性、社会起業家という集団全体では多様性を獲得するに至っている。

8

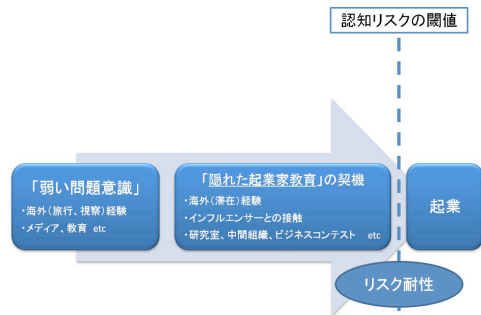


図2: 「隠れた起業家教育」の契機と起業過程

9

## 考察

- ・ 冷え込んだ創業を取り巻く環境にもかかわらず、人間関係、大学や中間支援組織の歴史的経緯やルールなどの「隠れた起業家教育の契機」の連鎖によって、個々の起業家の問題意識を起業に繋げていく回路が半ば偶発的に形成されている。
- ・ 結果、制度化された正規の起業家教育ほどの安定性はなく脆弱ではあるものの、継続的に多様で、個々の社会問題解決に適合した社会起業家排出に繋がっている。
- ・ 世界的に合意された「ソーシャルビジネス」の概念がこのようなインフォーマルな契機や、歴史的蓄積を経て、一過性の流行や「異物」ではなく、定着の兆しを見せつつある。

10

## 課題と展望

- ・ 本稿では、3つの事例から「隠れた起業家教育の契機」と呼ぶ概念を述べたが、その妥当性を補強するためにはより多くの事例の検討が必要。
- ・ 今回は、特定の大学という共通項と時間軸を通して議論を行ったが、このような概念が異なる場でも成立するのかということの検討。
- ・ より一層の、具体的な要素の特定と抽出。

11

## 参考文献

- ・ 経済産業省、2008、「ソーシャルビジネス研究会報告書」。
- ・ 西田亮介、2010、「社会問題の解決を収益事業化『社会起業家』が日本を変える」『週刊エコノミスト』2010年6月22日号、毎日新聞社、p.40-2。
- ・ 野村証券、2010、「市場別IPO動向」(<http://www.nomura.co.jp/wholesale/venture/ipo/index.html>, 2010. 9.11. )。
- ・ 谷口寛治編著、2006、『ソーシャル・エンタープライズー社会的企業の台頭』中央経済社。
- ・ 塚本一郎・山岸秀雄、2008「ローカル・パートナーシップと中間支援組織ー日英比較の視点からー」、塚本一郎・柳澤敏勝・山岸秀雄編、『ソーシャルエンタープライズー社会貢献をビジネスにする』丸善。

12

グローバリゼーションと都市変容 II  
——社会関係が社会起業家の創業動機に与える影響——

ご清聴ありがとうございました。

2010/11/7  
第83回日本社会学会全国大会@名古屋大学  
慶應義塾大学政策・メディア研究科  
西田亮介  
ryosuke@sfc.keio.ac.jp